

梅牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報

佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ

1 9 9 1

佐伯市教育委員会

例 言

1. 本書は佐伯市教育委員会が国庫及び県費の補助を得て実施した大分県佐伯市所在の佐伯地区遺跡群発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は大分県文化課の指導のもと佐伯市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測及び遺物の実測は河野史郎と新宅信久、後藤幹彦、阿部みゆきがあたった。本書の執筆は河野、新宅が分担して行い、各執筆の文末に記した。
5. 本文中の遺構番号については発掘調査を分担して行ったため、個々の調査で用いたものに準拠した。

※本文中で使用する略号は以下の通りである。

S B - 掘立柱建物、S K - 土坑、P i t - 柱穴、S X - その他の遺構

6. 本書の編集は河野と協議して、新宅が行った。

最後に本書を作成するに際し菊田徹、今泉正子、神田高志、亘鍋ノリ子（臼杵市教育委員会）、大分県文化課諸氏の方々に多大なる御教示を頂きました。記して感謝致します。

目 次

I. はじめに	1
II. 遺跡の調査	3
1. 木立地区の調査	3
2. 榎牟礼城関連遺跡の調査	5
1. 長畑地区の調査	5
2. 下掃木地区の調査	8
3. 天神ノ下地区の調査	9
4. 古市地区の調査	10
III. まとめ	16

I. はじめに

(1) 調査に至る経過

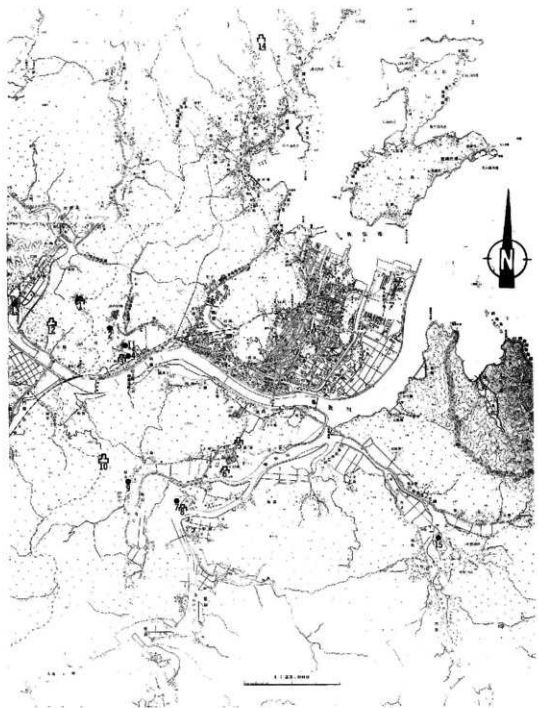
榑牟礼城は中世この地を治めていたとする佐伯氏が築いたとされ、この周辺には中世期に建立或いは由来すると言われる神社、城館、石塔、五輪塔など数多く見られる。榑牟礼城の築城年代や佐伯氏の系譜は近世の文献史学の面からアプローチがなされ大きな研究成果を上げている。しかし、佐伯地方に中世の古文書がほとんど残されておらず佐伯氏の居城・居館などを記した古文書も現在のところ発見されていない。

ところで、この榑牟礼城は古くよりその規模や形状から大分県でも指折りの山城として地元の方や多くの研究者の方々から指摘されていた。しかし、近年、宅地開発や林道開発事業などによって榑牟礼城を中心とする地域一体にも開発の手が徐々に伸びつつあるのが実状で、これらの点から将来への遺跡群保存の為に榑牟礼城址とその関連遺跡群の分布調査、試掘調査を実施して本年度で3年目を迎えた。昭和63年度は榑牟礼山系の城郭遺構の分布調査と測量、並びに山麓の試掘調査で平成元年度は榑牟礼山東麓での試掘調査の続行と圃場整備事業に関連する木立地区、堅田宇山城の発掘・試掘調査を行い中世の遺構を確認している。

本年度は引き続き榑牟礼山東麓と木立地区の調査を行い、また榑牟礼山から南東方向に位置する字名「古市」地区にも着目し試掘調査を行った。

(2) 調査団の構成

調査主体	佐伯市教育委員会	
調査指導員	別府大学教授	後藤 宗俊
	早稲田大学助教授	海老沢 衷
調査員	大分県教育委員会文化課	
	埋蔵文化財第1係長	清水 宗昭
	同 嘱託	新宅 信久
	同 嘱託	後藤 幹彦
	同 嘱託	阿部 みゆき
	佐伯市教育委員会 調査員	河野 史郎
調査事務	佐伯市教育委員会	
	教育長	烏井 喜久太
	社会教育課長	御手洗 正明
	同課長補佐兼係長	田嶋 栄治
	同副主幹	山田 健一



- 1 榎牟礼城 2 曳地 3 木戸城 4 十三重塔 5 中山砦 6 八幡山城
 7 宇山城 8 上ノ台 9 高城館 10 高城 11 古市 12 小田山城
 13 小倉藤原塔 14 河波ヶ城 15 木立

第1図 佐伯荘関連遺跡分布図

II. 遺跡の調査

1. 木立地区の調査

(1) 遺構(掘立柱建物SB-1)

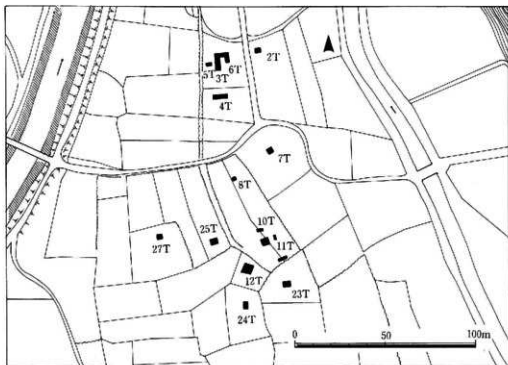
第3トレンチでは、掘立柱建物1棟が確認された。調査期間の限定と作業員の人数の制約により変則的なトレンチとなったが、建物の主軸方位N-99°-W、2間×4間(4.9m×7.8m)南側に底を持つ掘立柱建物が復元できる。柱穴の規模は55cm~70cm、建物南側のすぐ側で底部ヘラ切りの土師質土器が出土している。

(2) 遺物

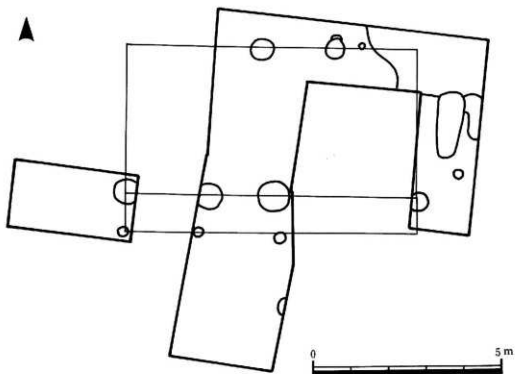
1. 白磁碗で復元口径14cm、玉縁の口縁部、乳白色の釉薬がかかる。(第23トレンチ)
2. 土師質土器の杯で底径8.8cm、底部は糸切りである。(第25トレンチ)
3. 土師質土器の杯で口径13.8cm、器高4.6cm、底径8.6cm、底部はヘラ切りで小さく外反する口縁部を持つ。(第3トレンチ)
4. 龍泉窯系青磁碗の口縁部で青緑色の釉がかかり、外面には蓮蓬弁文を持つ。(第25トレンチ)

これらの遺物は12世紀~13世紀のもので、したがって遺構もほぼ同年代と考えられる。

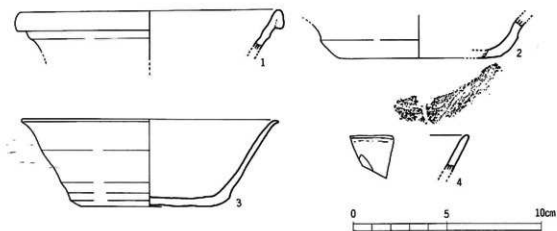
(河野)



第2図 木立地区トレンチ配置図



第3図 木立地区第6トレンチSB-1遺構実測図



第4図 木立地区出土遺物実測図

2. 柵牟礼城関連遺跡の調査

1 長畑地区の調査

(1) 遺構

長畑地区第2トレンチでは、近年の宅地造成、畑の耕作等による攪乱を受けていたにもかかわらず遺構の残りは良く、SK（土坑）とPit（柱穴）が確認され共に多量の土師質土器が出土した。

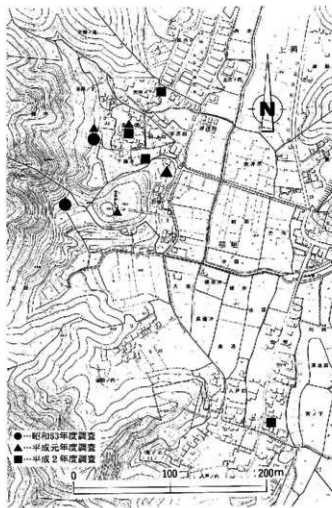
土坑に関しては、SK-1～3、5～9の計8基確認された。すべて方形又は長方形を呈しSK-2と7、SK-3と9で切り合いが確認された。その他、全ての土坑で多量の土師質土器の廃棄する状況が見られた。Pitに関しては、大きさ14cm～70cm、土坑と同じく全ての柱穴で土師質土器の廃棄が見られ、多いもので10個体を越す土師質土器を出土した

柱穴も存在する。またこれらの柱穴による掘立柱建物の復元は現時点では困難である。

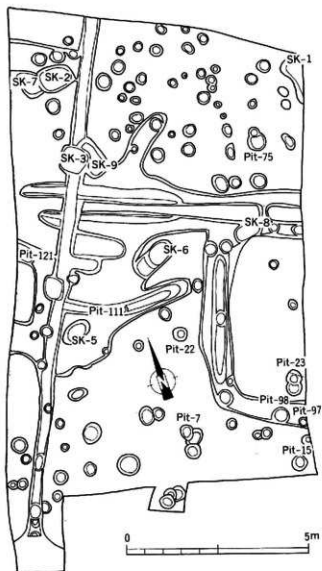
(2) 遺物

遺物は多量の土師質土器と青磁片、白磁片が出土した。輸入陶磁器類は、1は龍泉窯系青磁碗で内面見込み部に花文のスタンプが施され、暗緑色の釉がかかる。2は白磁皿で2点出土し、口縁は底部から直線的に開き、釉は乳白色で内外面共に中位まで施釉されている。

土師質土器は杯（3～13、22～24）、皿は法量によって皿A（14～19、21）、皿B（20、25、26）、脚付皿（27、28）が出土している。糸切り底の杯（3～13）は、全体に体部が直線的に逆「ハ」の字状に外に開く特徴を持つが、中には体部にやや丸みを持つもの（5、7、8、10）、

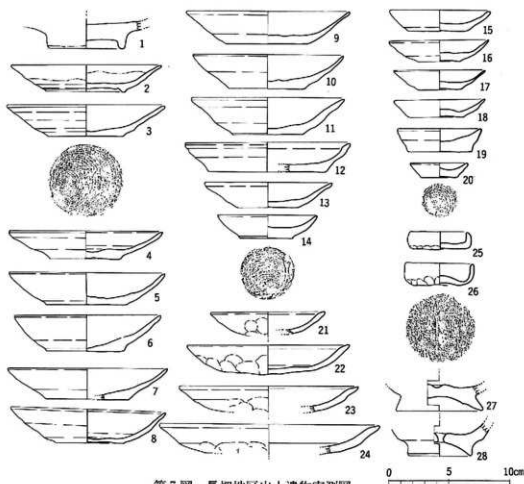


第5図 柵牟礼城関連遺跡トレンチ配置図



第6図 長畑地区第2トレンチ遺構配置図

器高に対し底径の広いもの(12)、内面に木口状工具による整形痕を残すもの(10)も存在する。皿A、皿B(14~20)に関しても同様に口縁が逆「ハ」の字状に開くのを特徴とし、器高に対し底径が広いもの(19)もある。皿Bは(20)の他に口縁部が湾曲したのも存在する。手捏ね丸底(21~26)のものは、口縁部下をナデにより凹状部をつくる杯(23、24)とナデのみの杯、皿A(21、22)と皿B(25、26)が存在する。脚付皿(27、28)は中心に穿孔が施された(28)と中央に凹部を持つ(29)が存在する。出土遺物は全て柱穴、土坑に廃棄された状態で出土したもので、土師質土器の底部糸切り杯、皿A、皿Bが遺物の主体を占め、続いて手捏ねのもの、輸入陶磁器の順である。以上、出土遺物については15世紀後半~16世紀に位置づけられる。(河野)



第7図 長畑地区出土遺物実測図

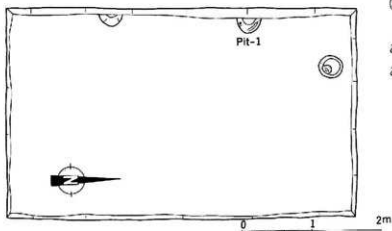
No	遺物	種類	寸法 (cm)			備考
			口径	底径	高さ	
1	Ph	鉢			6.2	口縁部部分に瓦文のスタンプ
2	SK	皿	12.5	2.3	6.8	内外共に中位まで肉厚がある
3	Ph	鉢	13.3	2.7	4.3	肉厚あり
4	Ph	鉢	13.2	2.4	6.1	肉厚あり
5	Ph	鉢	13.2	2.2	6.9	肉厚あり, 中々丸みをもち
6	Ph	鉢	12.2	3.1	4.6	肉厚あり
7	Ph	鉢	13.4	2.6	7.0	肉厚あり, 中々丸みをもち
8	Ph	鉢	13.9	2.7	5.7	肉厚あり, 中々丸みをもち
9	Ph	鉢	13.6	2.7	4.5	肉厚あり
10	Ph	鉢	12.6	2.9	6.4	口縁部へ凸状の瓦文あり
11	SK	皿	12.6	3.1	3.8	肉厚あり
12	Ph	鉢	13.6	2.3	3.8	口縁に瓦文のスタンプあり
13	Ph	鉢 (小)	10.6	2.1	4.8	口縁に瓦文のスタンプあり
14	SK	小皿	8.2	1.9	4.6	肉厚あり
15	SK	小皿	8.4	1.8	4.9	肉厚あり
16	Ph	小皿	8.2	1.8	3.4	肉厚あり
17	Ph	小皿	7.8	1.6	3.6	肉厚あり
18	Ph	小皿	7.6	1.5	4.4	肉厚あり
19	SK	小皿	7.9	2.0	3.4	肉厚あり, 肉厚大
20	SK	特小皿	5.9	1.2	3.0	口縁部に横線あり
21	SK	小皿	9.8	12.0		平打ち, 口縁にスタンプあり
22	SK	皿	13.0	2.5		平打ち, 口縁にスタンプあり
23	Ph	鉢	13.0	10.0		平打ち, 口縁にスタンプによる凹
24	Ph	鉢	13.5	12.0		平打ち, 口縁にスタンプによる凹
25	SK	特小皿	4.9	1.5		平打ち
26	Ph	特小皿	5.6	1.9		平打ち
27	SK	特小皿			5.2	平打ち
28	SK	特小皿			7.3	肉厚あり

第1表 長畑地区出土遺物観察表

2. 下掃木地区の調査

(1) 遺構

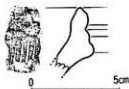
下掃木地区は昨年度調査を行った愛宕神社の南東に位置し、比高差が約37m程ある。この地区では2本のトレンチを設定し、第1トレンチにおいてのみ遺構を確認した。第1トレンチは3m×5mの設定で、現耕作土下約20cm程の遺構検出面よりPit 3基を検出し、この内Pit-1からのみ遺物を検出した。



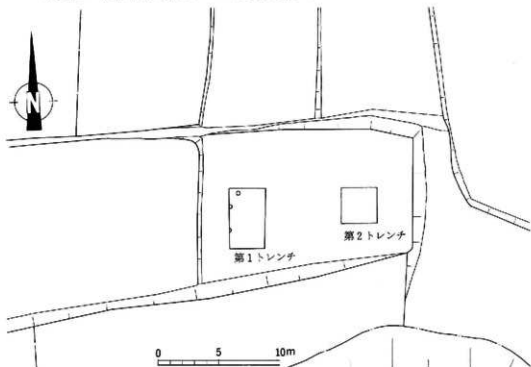
第8図 下掃木地区第1トレンチ遺構配置図

(2) 遺物

備前系摺鉢の口縁部である。時期は16世紀頃であろう。(新宅)



第9図 Pit-1出土遺物実測図

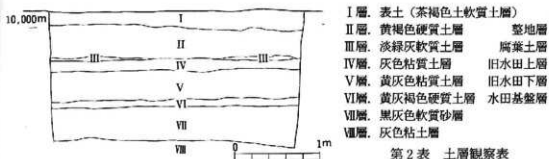


第10図 下掃木地区トレンチ配置図

3. 天神ノ下地区の調査

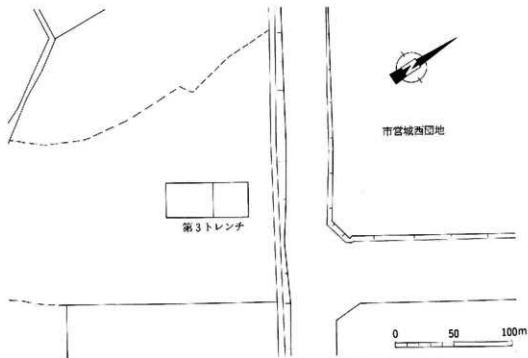
(1) 遺構

天神ノ下地区は榎牟礼山より張り出した「天神ノ尾」と呼ばれる尾根裾の入口部にあたる。この地区では3m×3mのトレンチを設置した。この場所は昭和初期までかなりの深田であったらしく、この地区に隣接する市営団地造成の際埋め立てを行っている。約1.5m程掘り下げを行った結果、旧水田層（IV、V層）中に時期が混在する形で遺物が包含され、VII層においては中世の土師質土器碎片を多く検出した。VIII層に至っては灰色粘質層でかなり厚く、調査期間等も考慮して旧基盤層までは掘り下げを行わなかった。



第2表 土層観察表

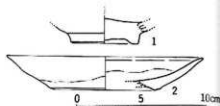
第11図 天神ノ下地区第3トレンチ北壁土層図



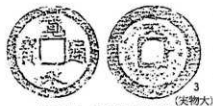
第12図 天神ノ下地区トレンチ配置図

(2) 遺物

1、2はIV層出土遺物である。1は龍泉窯系青磁碗の底部で、淡緑色の釉がかかるが、甕付と高台内には釉がかからない。2は白磁皿で口縁部から内外面の体部中位にまで明白色の釉が施され、甕付は斜めに削り出している。3はV層からの出土で寛永通宝である。VI・VII層からも遺物は認められるものの、完形に復元出来る遺物はない。以上、IV～VI層までは時期が混在し、1が14世紀、2が15世紀～16世紀である。また、3については背文字が「文」と見受けられ上限年代が17世紀後半代に位置づけられる。(新宅)



第13図 IV層出土遺物実測図



第14図 V層出土銅銭

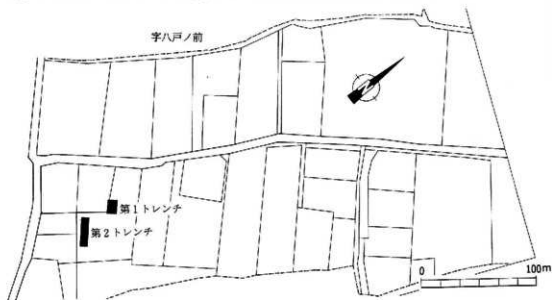
4. 古市地区の調査

(1) 遺構

当調査地区では3m×4m(第1トレンチ)、2m×9m(第2トレンチ)の2本のトレンチを設定し、いずれのトレンチも中世～近世にかけての遺構を検出した。

第1トレンチ

第1トレンチではⅢ層上面において近世のPitを19基検出した。各Pit内にはⅢ層が中世遺物包含層であるために近世遺物片と中世土師質土器片が混入している。Ⅲ層は約30cm程度の厚さがあり中世遺物の大半はこの層より出土している。IV層上面では中世のPitを17基と土坑1基(SK-1)を検出した。SK-1の覆土は炭化層であるが用途は不明である。Pitについてはトレンチの規模が小さく建物を復元するには至らなかった。



第15図 古市地区トレンチ配置図

(2) 遺物

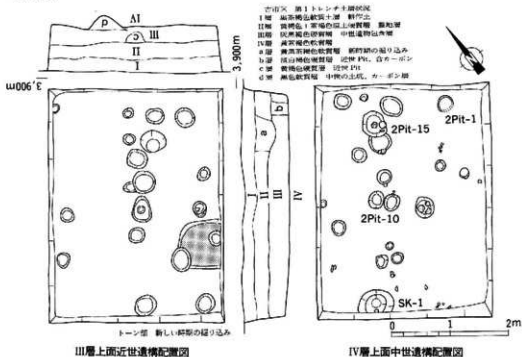
1. 近世遺物は碎片が多く復元出来るものはない。
2. 中世遺物はPit内と包含層から出土している。

① Pit 内出土遺物

1～4は土師質土器である。1、3、4は杯で、1、4はやや内湾しながら上に立ち上がる。3は体部が短く、斜上方向へ直線的に立ち上がる。体部下半及び底部が厚い。2は皿Bである。底径が5.3 cmで外に逆ハの字状に開く。

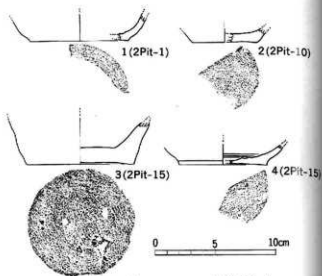
② III層包含層遺物

5～15までは土師質土器である。5～10、15までは杯で、5、6は器高が4.1cmとやや高く、斜上方向へ直線的に立ち上がり体部及び底部は全体的に厚い。口縁部は断面三角形をなす。9、10は器高が3.3cmと低い。9は底部が厚く口縁部が断面三角形をなし、立ち上がりがやや外に広がる。10はやや内湾しながら立ち上がる。5～10は糸切りである。15は口径が10cm、底径が5.9cm、器壁が0.3cmと薄手でやや斜上方向に立ち上がる。底部はヘラ切りで板状圧痕が認められる。11～14までは皿でAとBに分けられる。11は皿Aで体部が短く、斜上方向に直線的に立ち上がる。断面は三角形を呈する。12～14は皿Bで12は口径と底径が同比率で、体部は短くほぼ垂直気味に立ち上がる。13、14は器高が1.7cm、1.2cmと低く、いずれも内面見込み部に指頭圧による凹部が認められる。口縁部は丸みを帯びる。



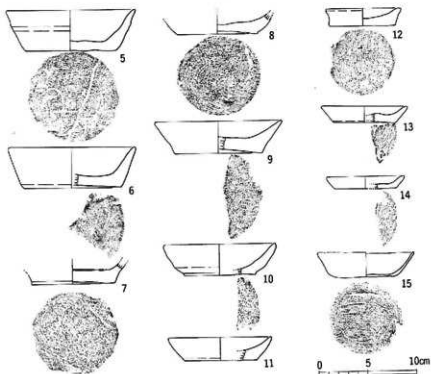
第16図 古市区第1トレンチ遺物配置図及び土層図

16は瓦質土器で碗の高台部である。調整は全体的に雑なナデを施し、高台は断面方形をなす。17~20までは輸入陶磁器で17、18は同安窯系青磁皿でいずれも淡緑灰色の施釉である。17は体部下半から外反し大きく開き口縁部の断面が三角形をなす。18は斜上方向に立ち上がり断面はやや丸くなる。19、20は龍泉窯系青磁碗である。19は口縁部で外面に蓮弁文の片彫りを施し淡緑色の釉がかかる。20は淡緑色の施釉で高台内と畳付には釉がかからない。21、22は須恵質陶器の甕で外面には格子目文タタキ、内面には同心円文当て具痕の後ナデ消しが施される。22は東播磨系埴鉢の口縁部で、外面が屈曲し明瞭な稜を持つ。口縁端部直下に内外面ともに強い回転ナデによる凹線が認められる。23は常滑焼の甕の口縁部で幅2.2cmの緑帯部を持ち、色調は緑褐色を呈する。

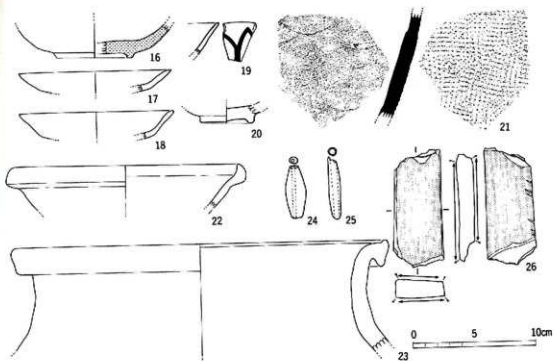


第17図 古市地区第1トレンチ中世 Pit 内出土遺物実測図

第18図 古市地区第1トレンチIII層出土遺物実測図(1)



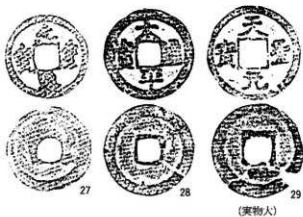
第18図 古市地区第1トレンチIII層出土遺物実測図(1)



第19図 古市地区第1トレンチⅢ層出土遺物実測図(2)

24、25は管状土錘で、24は全長4.4cm、最大幅1.7cm、内孔径0.2cm、重さ4g、色調は赤褐色である。25は全長5.2cm最大幅0.9cm、内孔径0.5cm、重さ4g、色調は淡黒灰色である。26は砥石で表裏2面使用で、かなり擦り減っている。27～29までは銅銭である。計3枚出土しており、27は「元豊通宝」で表裏ともに磨滅が著しい。

28は「太平通宝」、29は「天聖元宝」である。3枚とも背文字は見受けられない。



第20図 第1トレンチⅢ層出土銅銭

以上、近世に関しては遺物の残りが良くないものの京焼風陶器が出土しており18世紀代に、また、中世については輸入陶磁器や土師質土器等から13世紀後半～14世紀前半後に位置づけられよう。

(新宅)

左回りの巴文で蓮子数は15個である。

以上、出土遺物については18世紀代と考えられる。また、瓦については杵築小学校校内遺跡出土瓦に類似しており18世紀代に比定される。(新宅)



第22図 古市地区第2トレンチ出土遺物実測図

III. まとめ

1. 木立地区遺跡について

木立地区は標高6m～10m(調査対象区)である。同地区沖より弥生土器(後期、Ⅲ²³)の出土が知られており、当初より弥生時代の遺構の存在が推定されていたが、この時期の遺構は認められず、今回の調査で確認された遺構は平安末～鎌倉期にかけてのものであった。これまでの佐伯市における遺跡の立地は山麓部に集中し、同地区のような河川付近の平地地形もこれからの調査で重要視しなければならない。次年度も木立地区については確認調査の予定があり同地区の遺跡の分布が注目される。(河野)

2. 榎牟礼城関連遺跡について

本年度の調査は過去の調査を継続する形で試掘を行った。その結果、遺構に関しては長畑地区、古市地区で多数の柱穴を確認したが、残念なことに現在の宅地事情等による制約によって全体の遺構の性格や規模は不明である。出土遺物は遺構に伴うものはわずかでほとんどが包含層よりの出土である。従って、これらの遺物について共伴関係を明確に把握するには至っていない。古市地区第1トレンチで出土した土師質土器の杯は全体的に器壁が厚く、斜上方向へ直線的に立ち上がる。これは野津町八里合遺跡¹⁴出土の杯、菊田氏編年の臼杵市臼杵石仏群地域遺跡¹⁵出土の杯Ⅳ類と類似し、口径、器高ともほぼ変わりが無いが、器高についてはやや低くなるタイプもある。皿はその法量によってA、Bに分けたが、基本的には斜上方向に直線的に立ち上がるタイプであり、菊田氏編年の皿Ⅳ～Ⅴ期に比定出来る。これにより古市地区第1トレンチ出土の土師質土器は13世紀後半～14世紀の前半代に位置づけたい。次に長畑地区出土土師質土器の杯は大分市岩屋寺遺跡、三重町惣田遺跡¹⁶に似たタイプを求めることができる。特に手捏ねについては、豊後地域では16世紀代には玖珠町伐株山城跡¹⁷、大分市豊後国分寺跡¹⁸のように普遍的に出土する傾向を示す。昨年度の概報で、野氏は、長畑地区出土遺物について菊田氏編年Ⅷ期(16世紀後半代)にあたるとしている。しかし、今回出土の資料を合わせて考えると、輸入陶磁器は15世紀～16世紀初頭のもを伴っているものの共伴関係を示すには資料不足であり、土師質土器については形態的に若干の差異が見られ明確に16世紀後半代に位置づけることは難しい。また、昭和63年度調査した古市地区1区トレンチPit-2出土遺物(16世紀後半)とも明確に形態差が認められる。これにより長畑地区出土遺物に関しては15世紀後半～16世紀の中で把握の方が無難であろう。今後の資料の増加を待って編年が確立される事を願いたい。また、古市地区第2トレンチ検出の火災を裏付ける資料は、近世期に2回の焼失があったとされる伝承もあるが、18世紀に少なくとも一回の罹災を示す。佐伯には近世の「毛利家文書」と呼ばれる膨大な藩政資料が残っており、これらの中から明確な時期についての抽出が可能であろうが、今後の資料整理を待って補足を加えたい。(新宅)

(註)

- 註1 藤田喜代一氏の御教示による。
- 註2 高橋信武他「杵築小学校校内遺跡」 杵築市教育委員会 1987
- 註3 現在は木立小学校に保管されている。
- 註4 賀川光夫「重要文化財五輪塔修復工事報告書」 野津町教育委員会 1981
- 註5 菊田徹「臼杵石仏群地域遺跡」 臼杵市教育委員会 1982
- 註6 玉永光洋「惣田遺跡」 三重町教育委員会 1983
- 註7 渋谷忠章他「伐株山城跡」 玖珠町教育委員会 1984
- 註8 真野和夫他「豊後国分寺跡」 大分市教育委員会 1979
- 註9 他地域においては15世紀から認められるものもあり編年に時期幅が見られる。
- 註10 綿貫俊一他「楊牟礼城址と関連遺跡調査概報Ⅱ」 佐伯市教育委員会 1990
- 註11 高橋信武他「楊牟礼城址と関連遺跡調査概報Ⅰ」 佐伯市教育委員会 1989
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究NO. 2』1982
大橋康二「肥前陶磁」 ニューサイエンス社 1989
大橋康二他「国内出土の肥前陶磁」 九州陶磁文化館 1984

最後になりましたが、今回の調査トレンチの設定に際し、快く引き受けて頂いた藤田スナ氏、木許重雄氏、木許馨氏、木許邦彦氏に厚く感謝申し上げます。

発掘調査に御助力を頂いた方々

疋田月夫、疋田賢子、久保田実福、佐藤和己、宮下サヨ子、岩崎玉江、汐月エミ子、新名スガ、内山田幸枝、菅肇義、広瀬吉野、広瀬親、長沢キク、柴田定子、高瀬一、木原治義、高野茂夫、江藤磯吉、藤田喜代一（敬称略）

大変御苦労様でした。記して感謝致します。



1 長畑地区遺構検出状況



2 長畑地区SK-6遺物出土状況



3 下掃木地区、第1トレンチ完掘状況



4 第1トレンチ検出Pit-1遺物出土状況



5 天神ノ下地区、作業風景 (背景は梅牟礼山)



6 天神ノ下地区、第3トレンチ北壁土層状況



7 古市地区第1トレンチ近世遺構検出状況



8 第1トレンチ包含層遺物出土状況



9 第1トレンチ中世遺構検出状況



10 第1トレンチ中世Pit-15遺物出土状況



11 第1トレンチSK-1検出状況



12 第1トレンチ北壁土層状況



13 古市地区第2トレンチ遺構検出状況



14 第2トレンチSX-1内遺物出土状況



15 SX-1内遺物堆積状況



16 第2トレンチ遺構完掘状況



17 第2トレンチ西壁土層状況



18 第2トレンチ東壁土層状況



各トレンチ出土遺物

柁牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報

佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ

1991年3月31日

発行 佐伯市教育委員会

〒876 佐伯市中村南町1-1
電話 (0972) 22-3111

印刷 佐伯印刷株式会社

本社：〒870-91 大分市古国府1155-1
電話 (0975) 43-1211

佐伯工場：〒876 佐伯市中央区新屋敷343
電話 (0972) 23-0170